

減 災 の 思 想

小林 潔司

東日本大震災の経験を契機に、ひとびとは防波堤や防潮堤などの社会基盤施設のみでは、大規模地震の発生に伴う被害を完全に抑止することが困難であることを知った。また、このたびの 2018 年西日本豪雨災害を見るにつけ、事前の防災対策の重要性をあらためて痛感するとともに、自然の脅威の前には、高度な科学技術を用いても災害リスクを完全には制御できないことも思い知らされた。

このような大規模災害に対しては、被害の発生を抑止するという防災の思想だけでは限界があり、被害の発生・増大を可能な限り抑制しようとする減災の思想に立脚せざるを得ない。自然の脅威の前には、高度な科学技術を用いても災害リスクを完全には制御できない。

近代市民社会は、個人の理性と自由意思による個人の合理的選択を前提として成立している。個人は外的世界の諸々の事象、すなわち「客体」の間にある原因と結果の間に存在する規則性や法則性を明らかにする。個人は「主体」として、自由意思でもってそれらを参照しつつ、外的世界へ働きかける。通常、理性と判断力を備えた人間であれば、自由意思の適切な使用によって回避できる類の損害に対しては、自らの意思と責任でそれを回避しなければならない。しかし、東日本大震災を経験することにより、通常、理性と判断力を持った人間であっても因果関係を把握できず、それ故、予測不可能であるような災害が起こりえることを改めて認識させられることとなった。

減災の思想は、われわれが叡智を尽くしても制御しきれない大規模な災害リスクが存在しうるといふ土木技術の限界を謙虚に受け止めるという発想の転換に基づいている。それと同時に、防災の思想の前提となる想定を越えるような災害が起こった危機的状況においても、「自分の命を護る」という最低限の選択の可能性を保証するという宣言でもある。近代社会は、個人の尊厳と自由意思を最大限に尊重し、個人の合理的選択を前提として社会システムが機能することを前提としている。災害という危機的状況においても、「(最低限の)自由な選択肢を保証する」という近代社会の存在論的枠組みを堅持する。それが減災の思想である。

減災の思想は、防災というシステムの壁の外側に、さらに減災システムを新たに構築しようとする多重防御の発想に基づいている。防災と減災の境界、公的領域と私的領域の境界をどのように設定するのか、境界の内と外をどのように連携するのか、未解決な課題が山積している。土木工学には減災の哲学と、それを実践する方法論を構築する責務がある。防災と減災、公的領域と私的領域は、明確に区別されるものでもなく、両者が相互に

関連しあって、システム全体としてガバナンスが機能するような複合的システムとして理解することが適切である。そこでは、信頼というソーシャルキャピタルで支えられた人びとの協働が期待されている。阪神淡路大震災、東日本大震災の時もそうであったが、過去の大規模災害による被災後には、ひとびとの善意や助け合いの精神に支えられた数多くのボランティアな組織が生まれた。また、災害時における日本人の行儀のよさや秩序の良さに対する海外メディアの賞賛に対して、多少の面映ゆさを感じつつも、それを誇りに思った日本人は少なくないだろう。互いに助け合うことを尊重するようなひとびとのつながりが、一過性のものではなく、被災地の復興のための機運となり、さらによりよい地域づくりにつながっていくことを祈るばかりである。

不条理な災害に直面し、悲嘆のなかにも自分の不幸をしっかりと抱きしめ、無気力や暴力とは無縁に折り目正しく、自分がなすべきことを着実になすことにより、復興に向かって一歩ずつ歩を進めていく。このような被災者のありようは、世界の中で際立って特別なことかもしれない。被災地で生まれ育った人びとの強さとしなやかさ、人と人とのつながりを大事にし、知恵や知識に支えられて、たくましく着実に生きていく。それは、伝統的な日本社会のありようであり、リスク時代におけるひとつの豊かな社会の模範像を世界に対して示すことでもある。禅語『續燈録』に「松柏千年の青、時の人の意に入らず。牡丹一日の紅、満城の公子酔う」という言葉がある。牡丹の一時の艶やかな花に、満都の貴公子達は酔いしれる。松柏の青が人の目をひくことは少ないが、寒風吹きすさぶ候となれば、今まで目立たなかった松柏の不易の美しさが改めて見直される。被災地の一日も早い復興が希求されるなか、時をへても変わらない信頼のネットワークを支えとする力強い復興の鼓動が聴こえることを信じてやまない。